

地域での呼び方「五柱神社」

五柱神社

所在地住所・行き方

- 住 所：仙台市若林区藤塚字屋敷51
- 行き方：現在は人が住んでいないために路線は廃止されている。車で若林区六郷より県道54号線を南下し、県道10号線（産業道路）を右折、関上大橋手前の信号機で左折、旧集落内を通過していくと五柱神社に行ける。
- 近くの川、海：名取川、井土浦、仙台湾

縁起・由緒・伝承

旧郷社格の神社で伊勢神宮、賀茂神社、八坂神社、稲荷神社、春日神社の五つの神を祀っているため五柱神社という。

■御祭神

あまてらすおおみかみ かもわけいかづちのみこと すさのおのみこと うかのみたまのみこと あめのこやねのみこと
天照皇大神、加茂別雷命、素戔鳴尊、倉稲魂命、天児屋命

■効験

所願成就、五穀豊穰、厄除、除災招福、武運長久、商売繁盛、出世開運 他

■縁起

康平3年（1060）の前九年の役に源頼義、義家親子が常陸の国、村松（現在の茨城県那珂郡東海村）に勧請したものを永享7年（1435）の戦の後に足利持氏がこの地に移したという。のちに由来を聞いた伊達政宗が社殿を改築し、代々保護されてきた。

■伝承

五柱神社は昔、五社明神と呼ばれた海に面した神社で、5体の御神体がいかに乗って漂着したという伝承がある。境内には御神体を乗せてきた藤つるを埋めたところ、根をつけたという藤の木があり、すべてが左巻きのつるをくぐると疫病封じになるといわれた。この藤が藤塚の地名の起こりという。

（ウェブサイト「若林区の魅力発見事業」より）



震災前の五柱神社

現在の五柱神社（再建工事中）前には仮祠がある（2015年5月撮影）



周囲の様子と見どころなど

■周囲の様子

五柱神社の所在する藤塚は名取川河口の左岸側に開けた集落で、今は仙台市に属しているが、元は名取郡に属し、対岸の関上とは渡し船で行き来していたとのこと。神社脇の土手に上ると貞山堀、名取川対岸の関上を見ることができる。また東側を望むと貞山堀越しに井土浦の葦原、仙台湾が見える。

神社の正面に排水機場がある。この集落は名取川最下流にあり、低湿地を開拓して集落が形成されたため、古来洪水の被害に悩んできた地域である。3.11までは藤塚排水機場で上流よりたまった排水堀の水を貞山堀に排出して洪水被害を防いできた。地域の復旧のためには何よりも排水機場の修復が急がれている。



貞山堀と名取川対岸に見える関上

震災とその後のようす

平成5年に本殿を建て、平成20年にかけて修理が終了したばかりであったが平成23年の3.11津波で松の木1本を残して本殿、拝殿が流されてしまった。残念ながら藤塚の地名の由来である松に絡み付いたという藤を見ることはできない。

貞山堀の周りは豊かな松並木におおわれていたがすっかり枯れてしまった。また、震災前の藤塚集落には氏子が91世帯、その他4世帯の95世帯が住んでいたが、住居がすべて破壊され居住禁止区域に指定されている。



藤つるが絡まっていた松の木（2014年8月撮影）



震災前（2007年）の船だまり



震災後（2014年12月）の船だまり

地域の人々とのかかわり

この神社は「藤塚」「種次」「井土」の3集落で維持されてきた。主として藤塚の集落がその維持を担ってきた。先祖は江戸時代の初期に住みついたといわれ、400年続いてきた。町内会長で総代長も兼ねる東海林家は19代を数えるとのこと。

神社の脇は貞山堀があり、松林を挟んで井土浦がある。昔は葦原の葦を屋根材として使い、10

戸で組をつくり順番に屋根ふきをした。余った葦はよそで売って、家計の足しにした。その葦原を国より払い下げられた記念碑も神社境内に立てられていた。

元旦に元旦祭、1月20日は献膳講祭、4月15日は春祭り、旧暦の9月19日は秋祭りを地域の共同で営んできた。私達の取材に応じてくれた東海林総代長を始め、町内には95世帯ほどあったが、震災後「災害危険区域」に指定され、六郷中学校の向かい側に集団移転することになっている。集団移転の意向を示していた人は2年目で50世帯、去年（震災から3年目）で40世帯に減り、本年になって3分の1まで減ってしまった。

しかし、現地には住めないが、70%の住民は農地を持っていて、専業農家は4～5人しかいなかったものの、定年後は畑をやりたいと思っていた人が多かった。その人たちは、今も他の土地には行きたくないと思っている。

神社を再建して祭りを行えるようにすれば、他地域に移住した子どもたちがその時戻ってきてくれるのではないかと考えていると、語ってくれた。

（震災前の写真2枚は東海林会長より提供）



藤塚町内会のみなさん（右）にお話を伺った



地域での呼び方「蛸薬師」

ふちがみたこやくしるりこうによらいどう 淵上蛸薬師瑠璃光如来堂



右：蛸薬師如来堂、左：舞台八幡神社

所在地住所・行き方

- 住 所：仙台市太白区長町4丁目2-12
- 行き方：JR長町駅西口から徒歩10分。旧秋保街道を約100m西進後、路地を北に折れて300m程歩くと左側に石の鳥居と広い敷地が見えてくる。
- 近くの川、海：広瀬川

縁起・由緒・伝承

■御祭神(仏)

薬師如来（印相は右手が施無畏印、左手が与願印で、さらに左手には薬壺を載せている。）

■効験

無病息災、いぼの治癒、難聴回復、家内安全

■縁起・由緒・伝承

境内の立て札によれば、建武2年（1335）、藤原藤房が北山の巖蔵に入り僧となった時に京都西洞院の蛸薬師如来に願をかけて勧請したもの。

別伝によれば、昔洪水があった時、長町に古くから居住している川村家（川熊商店）の裏の池に蛸に吸い付かれた薬師像が流れ着いて、それを祀ったものという。

歴史研究家の飯沼勇義氏によると、この洪水は慶長津波（1611）によるものとされる。



像 容

周囲の様子と見どころなど

■周囲の様子

旧奥州街道の河原町から広瀬川を挟んだ対岸（南岸）の長町宿に所在する。広瀬川中流域から下流域に至る中間地点で、利府・長町断層の東側に位置し、太古は海浜であった。

幅50m、奥行100m程の境内には、社務所と町内の集会所が建てられている。街中にしては広い境内に、樹齢200～300年のイチョウの大木がある。今は旧国道より一筋外れた西側の路地に面して、周囲は密集した住宅地だが、人家が少なかった江戸時代は木立に囲まれた静かな村の鎮守社であったと思われる。

現在は整地され、昔の川筋は暗渠となって埋め立てられて水辺は見えないが、蛸が流れ着いたとされる川村家は、現在の宮城厚生協会長町病院付近にあり、病院の一



比良岐大明神

角に祀ったと言うところが残っていたという。

この辺りは金洗沢、二つ沢といった沢が筑川に合流し、その筑川が郡山の辺りで名取川に合流していた。ここに、蛸が流れ着いたということから、かつての蛸薬師近傍の地盤レベルは低く、洪水の被害を受けやすいところであったと思われる。

■見どころ

舞台八幡神社と並立して蛸薬師の堂宇が建てられている。また、右手奥には比良岐大明神が配置され、大きな馬頭観音碑も建てられている。薬師堂には、蛸の絵馬や、蛸足の吸盤をモチーフとした円盤がバウムクーヘンの様に紐で柱に吊り下げられている。難聴回復等を祈願したものという。並立する舞台八幡は明治になって平岡村舞台より遷宮、昭和に合祀された八幡神社で鎮守の神様でもあり、演芸人のお参りも多い。



蛸の絵馬や難聴回復祈願の円盤がかけられていた

震災とその後のようす

東日本大震災では、八幡神社や薬師堂の堂宇に被害はなかった。しかし、津波到達の伝説があるので、震災以降、参拝者が2～3倍に増えたという。

地域の人々とのかわり

比良岐大明神のそばに、馬頭観音の大きな石塔が建てられている。側面には「大町太物問屋中」とあり、その左脇に「京都飛脚中」、右脇に「江戸三度飛脚中」と刻まれている。江戸時代に仙台藩の経済の動脈を支えた荷物運搬の伝馬の宿駅を偲ばせる。

伊達政宗の慶長年間（1596-1615）、それまで主街道であった東街道に替えて、新たに奥州（おうしゅう）街道が開かれ、長町は仙台北下から江戸に向かう第1番目の宿駅となった。

その後、万治2年（1659）、南長町諏訪に城下南口警備の足軽町が置かれ、さらに寛文8年（1668）、広瀬川では大橋に次いで2番目の橋となる永町橋が長町渡に架橋されたという。街道に沿って細長い市街地が形成され、舞台八幡神社は、宿駅長町に暮らす人たちに信仰された。

社務所の管理人によると、現在の氏子が住んでいる範囲は、広瀬川河畔の長町1丁目からJR長町駅前付近までに渡る。常駐の宮司はいないが、敷地内には社務所があり、管理人が社務所に宿泊して維持管理している。

舞台八幡神社は明治5年に村社とされた。現在も境内には町内の集会所が併設されており、地域コミュニティの中心となっている。

蛸薬師は、毎年5月3日、舞台八幡神社と同じ日に例大祭を開いている。午前中は子ども会の100人程が蛸神輿をひいて長町駅付近を回り、午後は青年会から50人程が参加し神輿をひいている。

例年1月14日にどんと祭が開かれ、裸参りも80人程が参加して行われている。平成26年のどんと祭では、3,000人の参詣者があった。



馬頭観音石塔



石塔の側面 かつての宿駅を偲ばせる道標

地域での呼び方「湊神社・富主姫神社」

みなとじんじゃ とみぬしひめじんじゃ 湊神社・富主姫神社



現在の湊神社と富主姫神社(合祀)

所在地住所・行き方

- 住 所：名取市閑上4-18（震災前：閑上2-3-17）
- 行き方：国道4号線名取バイパスを閑上に向かって県道129号線を東進、県道10号塩釜亘理線を横切ってそのまま、海の方に向かい貞山堀の橋を渡った正面（周辺は電気が復旧していないため、夜間は危険）。
- 近くの川、海：名取川、仙台湾



縁起・由緒・伝承

(1) 湊神社

■御祭神

健御賀豆智命、伊波比主命（経津主神の別名）ほか2柱

■効験

厄除け

■縁起

室町時代の応永年間（1394-1427）大和の春日大社の分霊を勧請し、湊明神社または、水門四社明神と称した。はじめは、閑上字大塚（明神堂）に鎮座し、明暦3年（1657）神託により現在の地（震災前の閑上2-3-17）に遷座する。旧社殿は明治13年（1880）の火災後の再建である。明治5年村社に列格、同40年幣帛供進社に指定された。同42年竹駒・富主姫神社を併せ祀る。（「宮城県神社名鑑」より）

(2) 富主姫神社

■御祭神

弁財天

■効験

開運、商売繁盛、技芸上達、海上安全、航海安全、陸上安全、漁業祈願

■縁起

江戸時代、塩場で製造した塩を幕府に献上するために船で江戸へ運搬する途中、房州（千葉県南部）沖で遭難し、船頭たちが竹生島弁財天に祈願して無事帰還できたというご利益に感謝し、

竹生島弁財天を伊藤家(製塩業)に勧請し、塩場近くの沼に弁天島を作り、氏神様として祀られたのが始まりとされている。その後も豊漁守護のご利益が数々あり、町中より参詣者が絶えないことから、^{とみぬし}富主島(現在の関上3丁目、宮下橋付近)に鎮座された。伊達藩の貞山運河開堀などを機に一時富主旅館へ遷座したのち、明治41年(1908)に湊神社へ合祀された。大正9年(1920)関上の住民によって、^{ひよりやま}日和山が築山されると、その山頂へご遷座致し今日に至っている。(御由緒板より)

周囲の様子と見どころなど

■周囲の様子

現地は名取川右岸河口部、間に広浦の汽水湖を挟み海岸より800mほど離れたところであるが、津波が標高6mの日和山の頂上2mを優に超える高さで襲った。震災前は頂上付近には桜の中木が囲み神社の境内らしい雰囲気だったが、震災後は松の木1本を残して緑はなくなっていた。震災から4年経ち、全国からの応援もあって、周辺は津波メモリアル公園として整備されつつある。頂上からは、関上の元の街並みがあったところから、名取川河口部、広浦、太平洋まで望むことができる。



復旧した公園の中心 日和山



日和山頂上から旧関上町内を望む

■見どころ

現地は大震災による津波被害からの復興を記念する地域として、整備されつつあり、関上地域の津波からの復興の進展状況を一望できる。日和山公園から道を隔てて、津波記念塔が立てられ、その高さは到達した津波の高さに合わせて作られている。震災前の関上浜のシンボルであった日曜ごとの朝市も再開され、客が戻ってきている。

関上浜は昭和8年3月3日の「昭和三陸津波」の襲来も受けており、後世に警告を残した「^{かいしやう}海嘯記念碑」もあったが、今回津波により倒され、再建場所を検討中である。



レンガ配置のモニュメント



日和山頂上より芽生えの塔(鎮魂と復興の象徴)を望む



仮置きされた^{かいしやう}海嘯記念碑



震災前の湊神社

震災とその後のようす

■震災前

震災前、忠魂碑と湊神社から遷座された富主姫神社社殿のあった平坦な日和山は、建造当初、2段の階段ピラミッドのような形状であったが、経年変化により、丸みを帯びたいびつな円錐形となっていた。かつては、「中嶋山」と呼ばれ、高さは約6mであったが、昭和三陸津波の際、高さ数mの津波が押し寄せ、付近住民は「中嶋山」に避難していた。



倒れたままの石碑と鳥居(湊神社跡地)

■震災後

旧関上町内の街中にあった湊神社は堂宇、鳥居が街並みと共に流され、富主姫神社も日和山の頂上を2mも超える津波に流された。その後、町内の宮大工のボランティアと全国からの支援で、日和山の頂上に湊神社と富主姫神社を合祀したお社が再建された。関上の被災者の心の拠りどころとなっている日和山には、現在も全国各地から多くの支援の手が差し伸べられ、来訪者も絶えず、鎮魂の場へと変化している。

地域の人々とのかかわり

震災前に関上地区には2,010世帯、5,845人が住んでいた。本年3月末の世帯数は474世帯、1,024人の居住人口となっている。

そんな中でも、被災2年後には、全国の神社関係者から、神輿をはじめとした支援によって、秋の例祭、復興祈願祭が開催されるようになった。仮設住宅入居者、遠方移転者が一堂に日和山に集い、神輿を担ぎ、縁日を楽しむことができるようになんてなっている。

旧市街地にあった湊神社の周辺は漸く宅地のかさ上げ復興が合意され、工事が急ピッチで進められている。その跡地には草の中に湊神社の標柱がポツンと立てられ、境内に立てられていた「八大龍王」等の大きな碑が10本近く鳥居とともに寄せられていた。

湊神社の再建について懸命に活動されている総代長の伊東明氏は「再建には資金も必要であることから、地域に人々が戻り、笑顔を見せるようにならなければ寄付金のお願いもできないので、地域の生業の復興をじっくり待つ」と話していた。

地域での呼び方「浪切地蔵」「浪切さん」

浪切地蔵尊

所在地住所・行き方

- 住 所：亶理郡亶理町荒浜隈崎 旧荒浜4丁目、5丁目境（現あぶくま区）
- 行き方：亶理インターチェンジより車で約15分
- 近くの川、海：阿武隈川、仙台湾、鳥の海

現在の浪切地蔵尊と万人子守地蔵尊（移転後）



福島県岩代町宮森万人子守地蔵尊縁起碑

縁起・由緒・伝承

御祭神（仏）

地蔵尊

効験

海上安全、厄除け・子守（万人子守地蔵尊）

伝承

天正年間（1573-92）、伊達輝宗が子の政宗の身体健吾武運長久を祈って帰依した地蔵尊が、現在の福島県の岩代町小浜に祀られていた。身の丈一尺四寸、胴まわり一尺七寸の木彫りの御尊体であった。江戸時代後期の夏のある日、子どもたちがいつもながらにご本尊を持ち出しては阿武隈川支流小浜川の地蔵川原でたわむれていたところ、おりからの雷雨によって御本尊を川原に残したまま立ち去ってしまった。川が増水して流れ込み、像は阿武隈川を経て後日はるばる荒浜まで流れ着いた。そのため思わぬ神崇にふれ、小浜地区一帯は厄病が蔓延して死者まで出たとのことである。

阿武隈川の河口では漁師がこれを拾いあげ「浪切地蔵」として祀った。そのことがあってから、今まで当地一帯に蔓延していた疫病や海上禍難もなくなり、一層信仰を集めるようになった。その後、荒浜の人々が木像に刻まれていた「岩代國小浜」の記銘を頼りに拾い祀ってきた木像を宿送りの形で小浜に送り届け、小浜では御本尊が久方ぶりに無事帰堂安座されるや否や、厄病が嘘のように治まり平安な暮らしに戻ることができたと言われている。

一方、本尊が流れ着いた荒浜においても宮森に御本尊をお返しした後、同様の異変が起こり、海上禍難などに見舞われるようになった。そのため信心深い荒浜の人々が石の尊像を建立して、その名も浪切地蔵尊と称名し御神慮を鎮められ、暫くしてから安穏な日々が甦ったと伝えられている。（「小浜万人子守地蔵尊碑文」と「阿武隈川下流地域の地名・伝説の考察」より）

その後昭和10年（1935）ころ小浜で御本尊の万人子守地蔵を石像に刻んだので、荒浜では小浜の信仰者より新しい石の本尊の写真をいただき、信仰者たちが相計って石像を刻み万人子守地蔵尊として併置した。（「阿武隈川下流地域の地名・伝説の考察」より）

周囲の様子と見どころなど

周囲の様子

阿武隈川河口右岸に位置し、像に向かって右側には阿武隈川の堤防があり、防潮堤として工事中である。所在地の地名は「隈崎」で、元は阿武隈川が大きく湾曲して、地先が出っ張った低湿地であった。

地蔵尊は真新しいコンクリート基礎の上の真ん中に浪切地蔵尊、向かって右側に万人子守地蔵尊があり、両脇に多くの石碑が配置されている。

見どころ

村社でもない地域の小さな社で、通例であれば廃尊となり、地域の方々から忘れ去られる恐れがあったが、その文化的な価値が認められて存続したことは一見の価値がある。これまでも地域に愛され続けてきた浪切地蔵は、現在は空を背にして開放的な佇まいとなっており、新しい地域の象徴として生まれ変わろうとしている。



工事の進む防潮堤と拡幅予定の道路。この堤防の階段の所に集会所、道路の左側三角コーンの辺りに地蔵尊堂があった。

震災とその後のようす

震災前、地蔵尊には鞘堂があり、狭い町道を隔てて集会所もあり地域のコミュニティの中心であった。3.11の津波は周囲の人家と鞘堂を流し、地蔵と石碑群のみが残った。浪切地蔵尊はそのまま残ったが、万人子安不動尊は首がとれてしまった。津波は近隣の住宅の2階の床上からひざのところまできたが、河口の近くにもかかわらず、地蔵尊の後ろの家から7軒ほどは流されずに残った。現在は堤防にかかるため取り壊されている。

周囲の旧市街地は津波に襲われ壊滅的な被害を受け一面荒れ野のような状態だったが、震災から満4年、中学校も再建され、建て替えられた住宅も散見されるようになり、復興の息吹を感じさせる。



移転前の浪切地蔵尊と首のとれた万人地蔵尊

地域の人々とのかわり

今回の津波で地蔵尊の背後の住宅は数軒を除いて流され、地蔵尊の前の5丁目150戸も居住禁止区域に指定された。4丁目60戸もあったが、この地に残った住民は数戸で、バラバラになってしまった。

地蔵尊も防潮堤建設と道路拡幅の敷地にかかるために廃尊の危機にあったが、存続を願う地域の方々の尽力によって、昨年11月、旧地より50m西側の約100坪の敷地に移転した。敷地は町が購入し、移転費は国が負担した。将来は公園として整備する予定である。

かつては地蔵尊の夏祭りが毎年8月23日に開かれ、当日になるとどこからともなく、マイカーが狭い路地にあふれ、親子でお参りに来ていた。早く震災前のように夏祭りが開催されることを住民は待ち望んでいる。

1 五十鈴神社

・五十鈴神社パンフレット

2 荒澤神社

・宮城県神社庁ウェブサイト
・ウェブサイト「南三陸町VIRTUAL MUSEUM」(南三陸町)
・書籍「自然の輝～志津川町誌」(志津川町誌編さん室編・1989)

3 荒島神社

・パンフレット「南三陸時間旅行」(南三陸観光協会・2010)
・南三陸町観光協会ホームページ
・宮城県神社庁ウェブサイト
・書籍「自然の輝～志津川町誌」(志津川町誌編さん室編・1989)

4 上山八幡宮

・宮城県神社庁ウェブサイト
・上山八幡宮パンフレット「上山八幡宮ご参拝のしおり」
・ウェブサイト「東北物語」(株式会社ジェイアール東日本企画)
・書籍「光に向かって～3.11で感じた神道のこころ」(川村一代著・2012・晶文社)
・書籍「南三陸日記」(三浦秀之著・2012・朝日新聞出版)
・書籍「3.11からのことづて」(渡辺祥子著・2014・T〇ブックス)

5 大島神社

・宮城県神社庁ウェブサイト

6 白髭神社

・白髭神社ウェブサイト
・三陸河北新報 2014.11.06

7 浪分神社

・境内揭示版「浪分神社の由来」

8 八大龍王碑

・書籍「仙台の石仏散歩」(木村孝文著・1996・宝文堂)
・書籍「若林の散歩手帳」(木村孝文著・2000・宝文堂)

9 五柱神社

・仙台市若林区ウェブサイト内「若林区の魅力発見(平成14年度仙台開府400年記念事業)」

10 淵上蛸薬師瑠璃光如来堂

・書籍「仙台平野の歴史津波」(飯沼勇義氏著)
・書籍「仙台市史【特別編9】地域誌」(仙台市史編さん委員会編集・2014・仙台市発行)

11 湊神社・富主姫神社

・宮城県神社庁ウェブサイト
・ウェブサイト「READYFOR?」内ページ「被災地関上の日和山を訪れる人の安全のため階段に手すりを!」
・書籍「解き明かされる日本最古の歴史津波」(飯沼勇義著・2013・鳥影社)
・書籍「仙台平野の歴史津波」(飯沼勇義著・1995・宝文堂)
・書籍「宮城県神社名鑑」(宮城県神社庁著・1976)

12 浪切地藏尊

・「水と郷土荒浜」: 2014.09.08 江戸寿(資料)
・ブログ「復興非営利団体わたり・あらはま」
・「阿武隈川下流域の地名・伝説の考察」阿武隈川下流水回廊構想懇談会歴史文化を語る会編 平成12年度発行

おわりに

MELON水部会が、これまでの活動を踏まえて今回の調査を実施した意図は「はじめに」に記載し、また宮城県沿岸地域に所在する「水の神さま」関係の12社について取り組んだ具体的な活動と成果については各本文に記載しましたので、終わりに当たっては、総括的な感想と今後の活動の展望について触れたいと思います。

まず第1に指摘しなければならないのは、2011年3月11日に発生した東日本大震災の影響の大きさです。今回の企画が沿岸地域をエリアとしていることから、このことは取り組む前からある程度予想できましたが、「はじめに」に記載した実際の被害を目の当たりにすることにより、改めて今次大震災の過酷さを実感しました。他方で、巨大津波により甚大な被害を受けた地域の社で、遠方の地域・人々からの支援を受け復興の助けになった話を聞くことができ、人々のつながりの奥深さを再認識することができました。

水部会の今後の活動ですが、時間の関係で沿岸部に所在する社で調査できなかったもの、一定の調査はしたが報告書が未了のものについて必要な作業を行うとともに、数年後には今回取り上げた12社のその後についても追跡調査できればと思います。

最後に、私たちが今回の活動を通じて感じたことは、「神社等の祭事は地域コミュニティの構築に重要な役割を果たしており、大震災によって被災した水の神さまの再興がコミュニティの復活に結びつくはずである」ということ及び「神社等に関わる歴史・文化をどのように記録し次世代へ継承するかが大切である」ということです。

沿岸地域の「水の神さま」が繋ぐ 水と人の歴史文化伝承プロジェクト報告書

発行日 2015年5月21日

■ 編集・発行：公益財団法人 みやぎ・環境とくらし・ネットワーク(MELON)水部会
〒981-0933 仙台市青葉区柏木1-2-45フォレスト仙台5F
TEL 022-276-5118 FAX 022-219-5713
Email melon@miyagi.jpn.org

■ 印 刷：株式会社東北プリント

この冊子は一般社団法人WNI気象文化創造センターの「気象文化大賞」に係る助成で作成しました。



沿岸地域の「水の神さま」が繋ぐ
水と人の歴史文化伝承プロジェクト報告書

